

論文題目 小学校社会科のシティズンシップ教育実践の研究

人間科学研究科人間科学専攻 16DH001 坂井 清隆

論文内容の要旨

第 I 章 研究の目的 第 1 節 研究の目的

「シティズンシップ教育 (Citizenship Education)」は、1990 年代後半に、イギリスやアメリカなどの欧米諸国だけでなくアジア諸国においても、国民国家の維持・発展を担う、もしくは民主主義社会を支えていく「市民」として、十分な役割を果たせるような「資質」を育成しようとする教育として、幅広く取り込まれるようになった。

近年、日本においても、ポスト福祉国家として新自由主義にもとづく地方分権化や若者の投票率の低下をはじめとした政治参加意識の希薄化、また、国際社会・地域・コミュニティにおいて新しい公共性を創り出す必要性が増す中で、シティズンシップは、「市民社会をどう形成していくか」「市民社会でいかに振る舞うか」などといった概念へと変容してきている。

このように、シティズンシップは、これからの社会づくりで必要とされている市民の「資質」として提案されている。

このような社会的課題を踏まえると、シティズンシップ教育は、日本の社会にとってさらに必要性を増していると考えられる。近年、複雑化する社会に対して自他の権利を尊重しつつ主体的協働的に関わることや、少子高齢化のさらなる進展に伴う新たな地域・社会の創出が求められている。そのような社会にあつて、社会を多面的に捉え、社会的責任をもちながら自ら参画していこうとする力を育てようとするならば、シティズンシップ教育において、子ども自身が切実性をもって問題解決に挑み、協働的に追究していく学習を有機的に組織していくことが重要な意味をもつものである。その際、とりわけ、戦後の日本の教育において、民主主義社会を支える人間を育てる上で重要な役割を期待されてきた「社会科」は、シティズンシップ教育を中心的に担うべき科目であると言えよう。

そこで、本研究では、筆者自らが上記のような課題意識を持って取り組んだ社会科でのシティズンシップ教育実践を対象とし、質的な分析を行って、シティズンシップ育成のための実践上の要点（他者への参照可能性、指導の際の留意点など）を明らかにすることを目的とする。

第 2 節 本研究におけるシティズンシップの定義

シティズンシップ：「社会的事象を多面的にとらえ、社会的責任を自覚しながら、地域・社会に積極的にかかわっていこうとする資質」

めざす市民：「よりよい社会づくりに積極的に参加・貢献しようとする者」

第 II 章 シティズンシップ教育の動向

第Ⅱ章では、シティズンシップ教育の世界的動向を踏まえつつ、日本におけるシティズンシップ教育の意義と必要性を示した。日本のシティズンシップ教育を巡る一連の議論においては、日本の経済的成長や発展を支える人材の育成を主張するシティズンシップ論がみられたものの、その一方、自他の権利を尊重し、他者と関係構築を図りながら主体的な社会参加・参画を主張するシティズンシップ論を見出すことができた。特に、小玉重夫は、近年の脱福祉国家という文脈において、アマチュアとして主体的な政治参加を行っていく現代的な市民社会の形成を図ることを提起している。これは、社会に参加し、そこで他者への応答的な責任を果たしていくというシティズンシップ育成上の重要な観点であることがわかった。また、日本における社会科教育の原点である、戦後「初期社会科」の理論（民主主義社会を支える人間を「問題解決学習」を通して育てる、「個」の育ちの重視）から、現代社会に求められるシティズンシップ教育のあり方についても重要な示唆を得ることができた。

第Ⅲ章 先行研究の検討

第1節 日本のシティズンシップ教育における実践研究

代表的なシティズンシップ教育の実践研究について、〈単元研究〉〈授業研究〉の観点から検討を行い、実践研究上の課題を明らかにした。検討の結果、日本のシティズンシップ教育の実践研究では、中等教育の単元開発に重点が置かれているとともに、単元全体や授業展開における学習者の学びの姿をシティズンシップの観点から可視化する必要があることが示された。そこから、小学校社会科でのシティズンシップ教育の単元構想を行いつつ、単元及び授業を含む教育実践の精緻な検討・分析を進める必要があることが明らかになった。

第2節 小学校社会科におけるシティズンシップ教育の実践

小学校で実践された事例について、上記と同様に〈単元研究〉〈授業研究〉の観点から検討を行い、実践上の課題を明らかにした。検討の結果、本節で取り上げたシティズンシップ教育の実践の特徴は、社会的事象に関する知識を習得するよりも、子どもが持っている知識を活用して、個性を発揮しながらよりよい社会づくりに参加・貢献する能力の育成に重点を置いたものであった。また、時事的・社会的な問題、人々の価値が対立する問題、それに向けた解決方法などを単元の重要な学習内容としたものであった。これらのことは、シティズンシップ教育の単元を構想していく上で重要な点であることが示された。また、上記のような実践論の他に、神奈川県立総合教育センターでの取り組みは、本格的な研究ではなかったが、方法論として単元展開を可視化して子どもの学びを明らかにすることが重要であることがわかった。ただ、品川区「市民科」における実践では、道徳教育における徳目主義的教育内容の傾向が強く、この点については、その子にふさわしい個の確立をめざすという立脚点から批判的に捉える必要があることがわかった。

第Ⅳ章 研究の対象と方法 第1節 研究の対象

〈単元構想の要点〉

小玉のシティズンシップ教育理論や初期社会科の理論を踏まえると、単元構想に関して以下の4点が、重要な要点として予想される。尚、このような単元構想は、経験主義的教育観に基づく新しい問題解決学習を重視するものである。

- ① 「社会形成」を単元構想の「目標」として取り入れること。
- ② 政治的決定（価値判断・意思決定）を求める問題を「内容」として取り入れること。
- ③ 「問題解決」を「学習方法」として取り入れること。
- ④ 子どもそれぞれの発達段階を考慮すること。

〈対象とする事例〉

研究の対象とした教育実践は以下の6事例である。

番号	学年	分野	単元名
実践①	4年生	地域学習	防災について考えよう
実践②	4年生	地域学習	昔から伝わるものについて考えよう
実践③	4年生	地域学習	これからのX市について考えよう
実践④	6年生	歴史学習	遣唐使について考えよう
実践⑤	6年生	歴史学習	条約締結について考えよう
実践⑥	6年生	政治学習	消費税増税について考えよう

これらは、すべて筆者が構想して行った教育実践である。学習分野に

ついては、全6事例中3事例が地域学習、2事例が歴史学習である。本研究テーマに対応する単元を開発する場合、まずは、社会的問題を取り上げ、なおかつ、シティズンシップが表出するような内容があるかどうかが必要な条件だと考えた。中学年の地域学習、高学年の歴史学習の事例においても学習の内容としては、公共性や政治性が含まれているものである。

第2節 研究の方法

本研究は、シティズンシップ教育実践の中で、社会的事象を巡る子どもの対話的コミュニケーションを中心として検討していくものである。特に単元の中核的な授業である「会議」は、議論によって成り立つ営みである。よって、単元展開及び議論における子どもの発言(声)を最も重視する。このような子どもの「発言(声)」の事実を記録として再現することは、子どもの思考を可視化し、子どもの思考の有り様を解釈することに通じる。また、時系列に記録として起していくことで、子どもの思考プロセスや他の子どもとの関係性を明らかにすることも可能となると考えられる。したがって、単元展開や授業(会議)での子どもの発言(声)をとらえ、その発言を再現した「単元の展開—相関図」と「授業記録」に基づいて、単元や授業を分析・考察していくものである。

○単元研究(単元の様相—解釈)

単元研究に関しては、田代(1989)の授業の様相—解釈的研究を援用した「単元の様相—解釈」を行う。ここでいう単元の様相—解釈とは、単元展開において、展開の構造的全体像を「様相」として示し、その上で、子どものシティズンシップがどのように芽生え、育っているのかを「解釈」することである。現実の単元展開では、実践者がねらいとしているシティズンシップが、授業が進むに従って予定調和的にストレートに育成されていくものではない。

よって、実践者が事前に計画した単元と実際に展開した単元の差異(単元が生成・発展していく有り様)を「様相」として示し、シティズンシップ教育の定義である「多面的な捉え」「社会的責任」「社会参画」の三つの観点に基づきながら、子どもの言動や教師の働きかけと

関連付けたシティズンシップの姿を「解釈」していく。

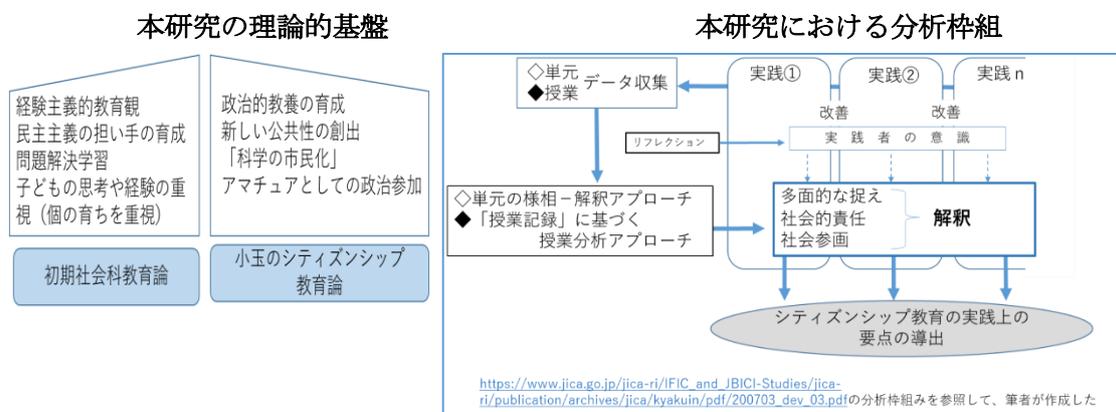
○授業研究（授業記録に基づく授業分析：記述—解釈）

授業研究に関しては、重松（1961）が提唱した「授業分析」に基づく方法をとる。「授業分析」は、実践者および子どもの言動を出来る限り詳細に記録した「授業記録」（逐語記録：記述）を基に、教師の指導性や子どもの活動の意味について「解釈」し、その授業特有の価値や特徴を検討していくものである。授業分析の対象は、各単元の「中核的な授業」である。ここでいう中核的な授業とは、シティズンシップの要素である（協働的な）社会形成に深く関わる教育方法としての「議論（会議）」を用いた授業である。このように、事実としての記録に基づいた授業分析によって、単元の中核的な授業で生起する子どものシティズンシップの芽生えや育ちを、3つの観点「多面的捉え」「社会的責任」「社会参画」から解釈していく。

○単元及び授業における実践者の意識 —リフレクションによる—

今回、自らの実践を研究対象としているので、その内容（実践の事実と解釈）をふり返って検討を加えておく必要があると考えた。それは、筆者が教育実践の当事者であるが故に、子どもや授業について自明視して意味が十分には捉えられないこともあると思われるからである。リフレクションは、実践者が見逃しているものや思い込んでいるもの、バイアスなどを明らかにすることを試みるものである。このように、リフレクションによって実践についての解釈を補完的に捉え直していくことも試みた。

第3節 本研究の理論的基盤と分析枠組み



第V章 研究の結果

○単元研究

〈多面的な捉え〉子どもたちが社会的な問題に対して、人々の多様な価値観や複雑な利害関係を踏まえ、多面的に深く考察をしていく姿をとらえることができた。

4年生の実践①では、地域防災に関して、学校が立地する地域の特徴、例えば、現在の地理的な状況や、歴史的な土地形成の経緯、生活者の特色、予想される被災状況などを、多面的に捉えて思考する子どもの姿が見られた。実践②では、伝統的な祭りのもつ歴史的な意味や現在の価値に留まらず、子どもに身近な地域の祭りの意味についても学級全体で、深く追

究することができた。実践③では、X市のこれからの街づくりや既存の観光資源の活用の観点から、自分たちが住み、生活する地域の在り方を問い直そうとする姿が見られた。

6年生の実践④では、菅原道真の遣唐使廃止の判断を巡って、遣唐使の廃止によって起こりえた事象だけでなく、継続した場合の国内外における影響についても考えようとする姿が見られた。実践⑤では、江戸末期の国政の責任者として、欧米列強との条約締結に対して、植民地回避や貿易による経済的発展、国内産業の衰退だけでなく、国民の安全や保護、生活などについても多面的に捉えて意見を述べていた。実践⑥では、実践⑤と同様に、国内政治の責任者として、国民生活に大きな影響があるとされる消費税の増税について、増税を実施した場合とそうでない場合について、今後予想される社会保障費の増加や国民生活の負担などの観点から、捉え直していこうとする姿が見られた。

〈社会的責任〉子どもたちが自分の生活経験だけでは十分には想像し得ない社会的存在を認識し、様々な立場から問題解決に向けて思考しつつ、問題解決の当事者として自覚する姿をとらえることができた。4年生実践①では、防災の観点から、本校が立地する地域（多くの子どもの居住地ではない）の人々の立場を、フィールドワークやインタビュー活動を通して把握し、それらの人々の立場を考慮しながら災害時の貢献の在り方について考えている姿が見られた。実践②では、山笠を対象としながらも、自分の居住地で行われている祭りに関して直接的にその運営に関わったり、それを支えたりする人々の存在に気づき、地域の祭りのもつ意味について考えている子どもがいた。実践③では、観光客の視点（X市外からの目）を想定しつつ、居住者・生活者（X市内からの目）の視点も含め、X市の問題を解決していこうとする姿が見られた。中でも、X市のイメージアップに貢献するもの、例えば、イベントや公共性のある施設、人物、年中行事などに強い関心をもつ姿が見られた。

〈社会参画〉子どもたちが社会的な問題の解決に向けた提言を行ったり、複数の解決策を吟味・検討したりするなど自らが社会に参画していこうとする姿をとらえることができた。4年生実践①では、本校が立地するM・N地区に居住する人々だけでなく、調査段階で出会った大学、防災関係者と関わりながら見出した本校の貢献内容と問題点を提言した。実践②では、X市の伝統文化である山笠を現在も支えている人々（振興会や人形師、ごりょんさんなど）や山笠に参加している友だちと関わりながら、自分たちの住む地域の祭りにも様々な形で参画・参加していこうとする子どもの姿が見られた。実践③では、X市の観光を管轄される行政の方や旅行業務に携わっている保護者へのインタビューを通して、国内からの観光客の目線からX市の特徴を捉え直し、パブリックコメントを通じてX市の問題解決に関して市長に提言した。

○授業研究

〈多面的な捉え〉子どもたちが会議で、様々な立場に立って意見を述べたり、他者の意見に理解を示したりする姿をとらえることができた。

実践①は、被災者の立場、学校の立場、行政の立場などから避難場所として適切かどうかについて、他者の発言を受け入れながら発言する姿が見られた。実践②では、「山笠」のもつ

歴史的な意味や重要性だけでなく、現在も継続・発展している意味について、担ぎ手やそれを支える人々の存在を通して捉える姿が見られた。特に実践②の、FD「地域のお祭りは、（中略）自分の『欲』だけでするお祭りではないか」という「突飛な」発言は、学級全体が自分の住む地域の祭りの意味を深く追究していく契機となっており、楽しさやおもしろさなどの表層面だけでなく、祭りのもつ重層的な側面に迫る子どもの姿が見られた。

〈社会的責任〉子どもたちが、それぞれ役割を自覚して、参加者と協働しながら会議をマネジメント（運営）していこうとする姿をとらせることができた。

このことについては、4年生実践①（防災会議をしよう）、実践③（観光会議をしよう）6年生実践⑤（老中会議をしよう）実践⑥の（閣議をしよう）において特に現れていた。実践①③では、提言や提案を行うこと、実践⑤⑥では、ロールプレイによって当事者意識をもちつつ意思決定を行う姿が見られた。例えば、実践①では、初めての会議形式の授業ではあったが、教師のマネジメントを必要としながらも、地域防災の在り方（小学校が地域に対してどのような貢献ができるか）に関して互いの意見を批判的に交流させる姿が見られた。また、実践⑤では、司会F児は、授業後のふり返りに「条約を結ぶかどうかとても悩みました。でも、結ばなかったら多く人が苦しむかく立（ママ）が高くなるし、これからの日本を考えると今は苦しくても乗り越えるべきだと思った。でもみんなが自分の方を見ていたので決めるのは本当に難しかった。」（下線は筆者）と記述している。このような悩みや決断の難しさへの自覚は、まさに社会的な責任を自覚している姿であると捉えられる。

〈社会参画〉子どもたちが地域の問題を含めた社会的問題を巡って、会議に主体的に参加する姿をとらせることができた。

実践①実践③実践⑥では、現実の社会的問題を巡って会議を行い、その中で積極的に発言する姿が見られた。特に、責任者（学長や市長など）への提言や提案、パブリックコメントへの投書など、学習を通して社会とダイレクトに関わることで、直接的に社会への参画意識をもとうとしている姿が見られた。〈単元研究〉でも触れているが、特に実践⑥では、実践⑤と同様に、ロールプレイをもとに、当事者意識をもちつつ、消費税の税率アップの是非について会議に主体的に参加している姿が数多く見られた。ただ、実践④⑤のような6年生歴史学習の場合は、単元の特性上、模擬的な社会参画となるが、子どもの要望としての「ロールプレイ」（役割演技）を媒介とすることによって、仮想的な場面においてでも主体的に会議に参加する姿も見られた。

なお、単元の中核的授業である会議においては、上記の三つの観点の他に、〈寛容性〉に関する姿として他者との議論を通して、他者の多様な考えを受け止めようとする姿が見られた。

このような寛容性として示される子どもの姿は、実践②、実践⑤実践⑥においてよく現れている。その一つの要因として、司会を子どもに委ねたことと司会の成長が挙げられる。司会は、前の実践の司会に学びながら会議を運営していた。例えば、発言に抵抗感がある子どもに意見を促したり、意見が出ないときには自分の意見を述べたりしている。特に、6年生では、実践事例における中核的な授業（会議）のすべてを子ども司会によって行っており、

友達の発言の意味を問い返したり、会議の停滞を捉えて別の話題にしたりすることができるようになっている。それに伴ってフロアの子どもたちも、議論が停滞しようとする中で、学級全体に問いかけたり、笑いを交えて会議の雰囲気を和やかにしたりする発言も出ている。

○実践者の意識-リフレクション-

実践者の意識は、実践を重ねる毎に変容し、それに伴って実践の「質」が変わっていった。実践者は、4年生の実践①では、シティズンシップの定義にとらわれすぎており、教師主導型の硬直化した展開に留まっていた。このことについての指導教授から指摘が絶えず行われて、実践者の子ども観や授業観を大きくゆさぶった。その結果、実践②以降では、子どもの視点（こだわりや疑問、ズレなど）を組み込んだ単元展開や、子どもの主体性を重視した授業展開を試みるようにした。その中で子どもに授業の運営を委ねることに対する不安や焦りはありながらも、一方では、子どもが司会を行う中で学習集団としての成長の「手応え」を感じた。この経験の積み重ねによって、単元展開や授業における実践者の余裕につながった。また、子どもの多様な発言を冷静に捉え、司会を通して間接的に学級全体に広げていくことも徐々にできるようになった。このように、実践者の意識が、4年生から6年生における実践の基盤として変容したことにより、教育実践の「質」が変わっていたのである。

第VI章 研究のまとめと課題 第1節 シティズンシップ教育の実践上の要点

(1) 単元研究 教育実践の単元構想と展開に関して、以下の要点(表-1)が示された。

表-1 シティズンシップ教育における単元に関する要点

項目	要点
単元構想	<ul style="list-style-type: none"> a. 「社会形成」を目標とする。 b. 市民（アマチュア）目線の解決が求められる内容を単元構成とする。 c. 議論を中心とした問題解決プロセスを組み込むようにする。 d. 子どもそれぞれの社会認識の発達段階を考慮する。
単元展開	<ul style="list-style-type: none"> a. 子ども自身の生活に関わる問題の発見を促す。 b. 「子どもの視点」を柔軟に単元展開に生かす。 c. 地域リソースを活用した単元を展開（再構成）する。

(2) 授業研究 教育実践における中核的な授業に関して、以下の要点(表-2)が示された。

表-2 シティズンシップ教育における中核的授業に関する要点

項目	要点
実践者の子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> a. 子どもを、社会を更新していく権利をもつ主体者として位置づける。 b. 個人記録などをもとにした一人一人の子どもの動的・多面的な理解に努める。
中核的な授業の内容	<ul style="list-style-type: none"> a. 多様な価値を含んだ社会的事象を授業のテーマとする。 b. 子ども自身が問題解決への切実性をもつような会議のテーマ（話し合い

	の「柱」を設定する。
中核的な授業の展開	a. 社会的な問題の解決を巡る議論の展開をサポートする。 b. 子どもに司会を委ね、子ども自身が会議を運営できるようにする。

※第2節は紙幅の都合上、割愛する

第3節 本研究の成果

本研究では、まず、シティズンシップ教育の動向及び先行研究を検討し、特に本研究の理論的基盤として、初期社会科教育論と、現代社会に求められるアマチュアである市民としての政治や地域参画を目指したシティズンシップ教育論が重要であることを示した。次に、小学校社会科においてシティズンシップ教育の実践に自ら取り組み、単元および授業を対象として、検証可能性をもつエビデンスをもとに、定式化した方法で質的に分析することによって、これまで十分に明らかにされてこなかったシティズンシップ教育の実践上の要点を示すことができた。

以下に、実践分析を通して見出すことができた本実践での子どもたちのシティズンシップの姿を、三つの観点〈多面的な捉え〉〈社会的責任〉〈社会参画〉からまとめる。

〈多面的な捉え〉は、4年生及び6年生のどの実践においても、人々の価値観や利害関係が複雑に絡み合った状況を踏まえ、様々な立場から事象を深く考察しようとする姿がよく現れていた。〈社会的責任〉は、4年生では、自分の生活経験だけでは十分には想像し得ない社会的存在を意識して発言する姿や、6年生では、問題解決の当事者として自覚して問題解決に向かおうとする姿が現れていた。〈社会参画〉は、特に4年生では、様々な専門家と関わったり、問題解決に向けた提言を行ったりするなど直接的に社会に参画していこうとする姿が見られた。6年生では、そのような社会参画の姿は見えづらかったが、社会的問題にかかわる様々な立場(役割演技)を通して、会議に主体的に参加しようとする姿はよく現れていた。

さらに、実践分析を通して、シティズンシップの新たな観点として、個人および集団における〈寛容性〉が見出された。この寛容性は、授業を積み重ねていく上で、多様性のある発言を受容したり、冷静に受け止めたりする子どもの姿から実践者が見出したものである。例えば、会議で、議論が行き詰ったり、発言者が勘違いした発言をして狼狽したりする場面などでは、それを責めたり無視したりするのではなく、「笑い」や「ユーモア」でもって受け止める姿が数多く見られた。また、突飛な発言(簡単には理解できないような発言)内容に関しても、その発言を回避・排除するのではなく、追究の対象としていこうとする姿が見られた。これらのことは、議論の場における余裕や落ち着き、冷静さを保ちつつ、議論を深めていこうとする姿であると解釈できよう。つまり、このような他者の意見を受け止めるような〈寛容性〉は、シティズンシップの新たな観点になりうるのではないかと考えらえる。

第4節 本研究の課題

本研究における実践事例については、社会科教育の主要な分野を取り上げて実践研究を行ってはいるが、社会科教育の特に地理や産業などを含めた全分野・領域を網羅して示しているとはいえない。この意味において、限定的な面はある。また、筆者が勤務していた

学校や担任していた子どもたちでの実践という条件のもとで行った事例である。これらの限定があるという点は確かに大きな課題といえるが、今後このような検証可能性のあるレベルでの実践研究がさらに自他によって推進されていくことで、実践間での相互検証が可能になると考える。さらに、その間隔を埋めていくことによって、シティズンシップ教育の実践上の要点が、より精緻に明らかにされていくことが期待されるのである。

その他に、今後の課題について、以下の点を挙げる。

・小学校社会でのシティズンシップ教育における新たな単元（例えば、産業領域や地理的分野など）と実践分析、及び実践研究の方法論上のさらなる精緻化を図る。

この点に関しては、現在、新たな授業分析の方法として「抽出児中心型発言表」を開発し、本論文でもこの発言表を用いた授業分析を試行的に行っている。今後、この発言表を用いたシティズンシップ教育の授業分析にも積極的に取り組んでいく。

・日本のシティズンシップ教育の他の教科等での単元構想や事例についても、実践研究によって検討し、さらに幅広く考察する。

・教科間の目標や内容構成関連にも着目し、シティズンシップ教育に関する各学年のカリキュラム開発（年間指導計画の作成）を試みる。

【引用・参考文献】（総数 214 編の中で主なものを一部抜粋）

1. 重松鷹泰（1961）『授業分析の方法』明治図書出版
2. 重松鷹泰・上田 薫・八田昭平（1965）『授業分析の理論と実際』黎明書房
3. 重松鷹泰（1975）『教育方法論』明治図書
4. 重松鷹泰編（1978）『授業分析の理論』明治図書
5. 上田 薫 静岡市立安東小学校（1982）『ひとりひとりを生かす授業—カルテと座席表』明治図書
6. 上田 薫（1986）『人間の生きている授業』黎明書房
7. 田代裕一（1994）『教育実践の課題と可能性』近代文藝社
8. Bernard Rowland Crick／長沼豊（2012）『社会を変える教育 Citizenship Education 英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから』キーステージ 21
9. 藤井千春（2010）『子どもが蘇る問題解決学習の授業原理—学習指導と生活指導を合体する指導法の魅力』明治図書
10. Donald Alan Schön／佐藤学 秋田喜代美訳（2003）『専門家の知恵』ゆみる出版
11. 齋藤純一（2003）『公共性』岩波書店
12. 齋藤純一（2010）『自由への問い 社会統合 自由の相互承認に向けて』岩波書店
13. 広田照幸（2012）『自由への問い 教育 せめぎあう「教える」「学ぶ」「育てる』』岩波書店
14. 長沼 豊（2003）『市民教育とは何か ボランティア学習がひらく』ひつじ市民新書
15. 小玉重夫（2003）『シティズンシップの教育思想』白澤社
16. 小玉重夫（2013）『学力幻想』ちくま新書
17. 小玉重夫（2016）『教育政治学を拓く』勁草書房
18. 小西正雄著（2010）『教育文化人間論 知の逍遥／論の越境』東信堂

19. 藤垣裕子 (2003) 『専門知と公共性—科学技術社会論の構築へ向けて』 東京大学出版会
20. 見田宗介 (2004) 『現代社会の理論—情報化社会・消費化社会の現在と未来—』 岩波新書
21. T.H.Marshall ,Tom Bottomore 著 岩崎信彦, 中村健吾訳 (1993) 『シティズンシップと社会的階級—近代を総括するマニフェスト』 法律文化社
22. 田代裕一 (1989) 『発言表』を使用する授業分析-ワープロ処理による授業の内容的構成の追求-』 教育方法学研究 第14巻
23. 田代裕一 (2009) 「授業実践の様相—解釈的研究-歴史の授業を事例に-」 西南学院大学人間科学論集 第5巻1号
24. 田代裕一 (2010) 「授業実践の様相—解釈的研究—グループ活動を含む事例の分析-」 『教育方法学研究』 第35巻
25. 田代裕一 (2011) 「カリキュラムの展開過程の研究—『発言表』を用いた生活科授業分析—」 西南学院大学人間科学論集 第6巻第2号

【発表論文一覧】

論文名	査読の有無 掲載誌及び掲載年月	博士論文該当箇所
シティズンシップ教育の検討 —カリキュラム・授業実践・学習者評価の観点から—	(査読無し) 西南学院大学大学院研究論集 第3号 2016年8月	第Ⅲ章 先行研究の検討 第1節 日本のシティズンシップ教育における実践研究
シティズンシップ教育の実践研究 —カリキュラムの様相— —解釈による—	(査読有り) 九州教育経営学会研究紀要 第20号 2014年6月	第Ⅳ章 研究の対象と方法 第2節 研究の方法 (1) 単元研究 (単元の様相-解釈) 第Ⅴ章 研究の結果 第1節 単元研究 (1) 単元の様相-解釈 6年生「遣唐使について考えよう」
シティズンシップ教育の開発研究 —小学校社会科における政治学習の実践分析を通して—	(査読無し) 西南学院大学大学院研究論集 第1号 2015年8月	第Ⅳ章 研究の対象と方法 第2節 研究の方法 (1) 単元研究 (単元の様相-解釈) (2) 授業研究 (授業記録に基づく授業分析: 記述-解釈) 第Ⅴ章 研究の結果 第1節 単元研究 (1) 単元の様相-解釈 6年生「消費税増税について考えよう」 第2節 授業研究 (2) 授業記録に基づく授業分析: 記述-解釈 6年生「閣議を開こう」
社会科授業における子どものシティズンシップの明示化 —「抽出児中心型発言表」を用いた授業分析による—	(査読有り) 日本教育方法学会「教育方法学研究」第41巻 2016年3月	第Ⅵ章 研究のまとめと課題 第4節 本研究の課題と今後の方向 及び資料編「老中会議を開こう」